令和３年１０月

第２回白山市総合教育会議

会　議　録

白　山　市

令和３年度　第２回　白山市総合教育会議

日　時　令和３年１０月２６日（火）午後４時
場　所　白山市役所４階　４０２会議室

１　開　会

２　市長あいさつ

３　協議事項
（１）教員の不祥事から子どもたちを守るために

（２）その他

４　閉　会

出席委員

白山市長	山　田　憲　昭
白山市教育長	田　村　敏　和
白山市教育長職務代理者	北　田　朋　幸
白山市教育委員	竹　内　千恵子
白山市教育委員	小　寺　正　彦
白山市教育委員	安　川　　薫

欠席委員

白山市教育委員	尾　張　勝　也

事務局出席職員

教育部長	山　内　満　弘
教育総務課長	米　木　伸　一
学校教育課長	東　野　　央
学校指導課長	日　向　正　志
生涯学習課長	北　嶋　　篤
子ども相談室長	川　上　照　子
教育総務課長補佐	杉　本　俊　彦
教育総務課係長	絹　川　幸　代

傍聴者　　８名

開会　午後　４時００分

○教育総務課長（米木　伸一）

定刻になりましたので、ただいまより令和３年度第２回白山市総合教育会議を開催いたします。今日は尾張委員が欠席という報告が入っております。

◎市長挨拶

○教育総務課長（米木　伸一）

本日の会議につきましては、非公開とする内容はないと考えられますので、原則どおり本日の会議を公開したいと思いますが、よろしいでしょうか。

○構成員

異議なし

○教育総務課長（米木　伸一）

それでは公開といたします。

開会にあたりまして、山田市長からご挨拶をお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

○市長(山田　憲昭)

本日、急遽、令和３年度第２回白山市総合教育会議を開催いたしましたところ、委員の皆様方には、お忙しい中ご出席をいただき、誠にありがとうございます。また、皆様方には、平素から白山市の教育の充実、発展のために、多大なご尽力を賜っておりますことを、重ねて感謝申し上げます。

冒頭、教育長より一言あいさつをお願いしたいと思います。

○教育長（田村　敏和）

教育長の田村でございます。さる１９日（火）、市内の中学校におきまして、現職の本市教員が県迷惑行為等防止条例違反で逮捕されました。きわめて遺憾

であり、生徒、保護者をはじめ、市民の皆様には多大なるご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。この件に関しましては、事実関係を調査の上、厳正に対処してまいりたいと思っております。また、先般、現職の本市中学校教員が、勤務する以前の他市の前任校で勤務をしているときに、当時、県内の高等学校に通っていた女子高生にわいせつな行為を行ったという事案が発覚し、懲戒免職処分になりました。さらに、本年６月に遡りますが、現職の中学校教員がストーカー行為等により逮捕されるという不祥事案が発生し、７月に懲戒免職処分となりました。今年度に入り、現職の本市教員によるわいせつ事案３件により２件の逮捕と２件の懲戒免職処分が行われたことは、教育公務員としての信用失墜行為であり、絶対にあってはならないことであります。あらためて、生徒、保護者をはじめ、市民の皆様には多大なるご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。今後、これらの事態を重く受け止め、教職員の綱紀粛正、及び服務規律の確保を徹底し、１日もはやく信頼を回復できるよう取り組んでまいります。以上です。

○市長（山田　憲昭）

今ほど教育長から報告がありましたが、今年度に入り、安全・安心であるべき学校で、それを保証すべき教員による不祥事が３件も相次ぎましたことは、たいへん遺憾であるとともに、この事態を重く受け止め、あらためて教職員の綱紀粛正及び服務規律の確保を徹底し、今後このような事態が起きないよう対策を講じ、信頼回復に向け早急に対応すべきと考え、急遽、皆様にお集まりいただきました。この事案を受け、本市の教育行政に対する世間の信頼は極めて深刻な事態に陥っております。児童生徒と向き合い、児童生徒の能力を伸ばし、夢や希望の実現に向けて日々努力をしている教職員の信頼と、地道に積み上げてきました学校への信頼が根底から覆されようとしております。児童生徒を教え、導く立場にある教育公務員は、高い規範意識を持ち、非違行為の防止に努めなければなりません。不祥事の問題は、個人の資質に起因する部分が大きい反面、周囲が予兆を把握し、行動が表面化する前に未然に防いだケースもあると聞いております。本日は、教員の不祥事、特にわいせつ事案の未然防止策につきまして、スピード感を持って対応すべく、委員の皆様の忌憚の

ないご意見をいただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○教育総務課長（米木　伸一）

ありがとうございました。

これより協議事項に移りたいと思います。

◎協議事項

○市長(山田　憲昭)

それでは、協議事項に入ります。本日の協議事項は、「教員の不祥事から子どもたちを守るために」です。

忌憚のないご意見をいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。では協議事項（1）「教員の不祥事から子どもたちを守るために」です。事務局より説明をお願いいたします。

○学校指導課長（日向　正志）

（資料にて説明）

◎意見交換

○市長(山田　憲昭)

ただ今、事務局からの説明が終わりました。

今回の不祥事を踏まえて、委員の皆さま方が思っていること、事務局が提案したこと等も含めてお話していただければありがたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。それでは安川委員からお願いします。

○教育委員（安川　薫）

この事案をいろいろ聞いて、まず腹立たしいというのが正直なところです。残念でもあります。一番心配なことは、やはり子どもたちの心のケアが一番

重要ではないかと思います。この事案は、学校の外のもの、あるいは中のものもあるかもしれないというところで、こういう事案をきっかけに、子どもたちが学校から足が遠のいてしまうということが絶対にあってはならないですし、おそらくは学校で窓口を設置するなど、早急な対応をしていただいていると思います。そういうケアの継続も、ここからここまでの期間ということで終わらずに、長いスパンを見ていただけたらいいのかなと思いました。それと併せて、先生方の服務規律等のことで、今日も小学校でお話がということもございました。先生方も当事者意識をもつ等、そういったことは、当たり前で大切なことなのですけれども、先生方がそれで萎縮してしまって、先生方が本来持っている力を発揮できない現場になってはいけないということも、とても大事だと思います。先生方に対する心のケアが必要かどうかはわかりませんが、子どもたちに対する指導というところに、先生たちのモチベーションであったり、ほどよく力の抜けた状態であってこそ、よいパフォーマンスをしていただけると思っていますので、子どもたちにとって、いい指導をしていただけるように、風通しのよい職場づくりとともに、先生の働きやすい心の状態も作っていただいて、あらためて子どもたちが安心・安全に過ごせる学校というものを作る配慮をしていただきたいと思います。以上です。

○市長（山田　憲昭）

ありがとうございました。小寺委員さんよろしくお願いします。

○教育委員（小寺　正彦）

まず、腹立たしいということを第１に思いました。各先生方と学校訪問時に接していると、先生方はプライドや誇りを持って、学校の授業に取り組んでいると本当に思います。けれども、気が付かないところに不祥事を起こす先生がいる。日向先生が言われた、具体的手当案の１、２はもちろんだと思います。研修は、これでもかこれでもかという形でやっていただきたい。そしてもう一つは、ここ数年見ているのですが、特に今年ぐらいは働き方改革も３年目ということで、先生方も結構余裕を持って仕事に取り組んでいるな、そして、月に１、２回ほどのノー残業デイもしっかり取っているようですし、月に８０時

間を超えた先生も減ってきたというところで、この事件が起きたということがなぜなのかと思ったわけです。そうした場合、やはり資質の問題も含めて、教師としてのプライドに欠けている先生がまだいる。そういったところで、学校の先生は、みんなから尊敬されるような人になっていただきたいということ。ただ、この資料を見て驚いたのは、中堅の先生が結構含まれている。３０代の先生が半分以上です。これはなぜなのか。就職氷河期も終わって、ゆるくなった時に採用された先生かなと見ていて思いました。先生方の仕事がきついということか。普通の職場と見たら変わらないような気がします。普通の職場は、特にコロナで厳しいところがたくさん出てきている中で、これくらいのことでは、仕事が厳しいと言えないのではないだろうかと思いましたので、まだまだ研修をたくさんして、先生としての資質が無いような人を管理職の先生は探していただいて、教育委員会と一緒になって、そういった人たちの排除も考えていかなければならないのではないかと思いました。働き方改革３年目で終わるのではなく、今年も来年も、もっともっと良い職場にしていくようお願いしたいと思います。以上です。

○市長（山田　憲昭）

ありがとうございました。では次に竹内委員お願いします。

○委員（竹内　千恵子）

私も、第一報を聞いた時は腹立たしいと思いました。では何に対して腹立たしいのかというと、やはりこの個人の教員に対してでありました。でもよくよく新聞等を読んでいますと、事が起こってから発覚するまでに時間がかかっているなという感じがいたしました。ですから、なかなか見つけるということが、難しいのだろうと思うのですが、その間に、やはり何回か起こってしまうと。初期できちんと見つける、あるいは未然防止しかないのではないかと思いました。例えば、本県でもこれだけあり、全国的にも色んな事案があるのであれば、ＡＩ等に特徴をたくさん入れていって、それらしいチェックポイントのようなものを見つけて、いったいどういう人がどういう時になるのかということをデータで集めて、そして、先ほど、小中学校へ出向いて行って、事例案

で研修を実施するとか、アンケートとかがあるのですが、あまり細かいアンケートをするよりは、今はタブレットを先生方も１人１台持っていますので、月に１回ぐらい、これは大丈夫ですかと３つ４つ出てくる。次の月にはまた違う項目がこれは大丈夫ですかとぱっと出てくる。そういうふうに定期的に先生方の注意喚起を促すというようなことも一つの手立てかなと。冊子を作って、これは注意しましょうと言って研修会をしているよりは、タブレットをうまく使ってできないかということは考えてみました。次は、事務局にお願いしたいのですけれども、安川委員からもありましたが、やはり児童生徒あるいは保護者にとって、学校は安心・安全な場所でないといけない。ですからまず児童生徒のケアというのをきちんとしていただいて、学校の日常を取り戻していただきたいということ、また、学びの保障というのでしょうか、ケアが第１ですけれども、学力ということも保護者の方は心配されると思うので、できるだけ授業の補充等のことも考えていただきたいというのが１点です。それからもう１点は、やはり安川委員と同じなのですが、学校を回りますと、先生方はプライドや情熱を持って、大半の先生はやっていらっしゃるので、先ほど腹立たしいと申し上げましたが、それは個人に対してです。○○中学校の先生、○○小学校の先生と一括りにして先生方を見ずに、ぜひ先生方を激励していただいて、それがひいては子どもたちにとって、学校の日常を取り戻すためになるのではないかと思いました。以上です。

○市長（山田　憲昭）

ありがとうございました。それでは北田委員お願いします。

○委員（北田　朋幸）

私も皆さんが言っていることと似ている事が多いのですが、私が学校訪問へ行った時に、よく言っていることは、常に子ども目線になってくださいということです。先生として、大人として、子どもを見下ろすのではなく、子どもの目線で見てあげるということ。昔は教員というのは、聖職と言われていました。私はこの世の職業の中で、１番人と出会える職業だと思っています。いろんな可能性がある子どもたちと出会って、その子どもたちが巣立って

いって、先生方が退職されて一番思うのは、どこの町に行っても誰かに会う。常に自分は見られているということをもっと意識していただいて、私は教員ではないですけれども、親には、信用を付けるには時間がかかるけど、無くすのは一瞬だということを特に言われてきました。信用、信頼はいとも簡単に壊れてしまうので、それをもう一回取り戻すときはどれだけ苦労するかということをよく考えていただいて、教員に関しては、生徒・保護者だけではなく、地域の方々、誰にでも尊敬される人間という人間形成をもう一度やり直ししていただく。いつでも、どこでも、誰かが自分を見ているということを意識してほしいと思います。あとは、いじめや不登校もすごくデリケートでいろんな形状があるので、一言には言えないのだけれども、１人で１人の生徒と対しないということです。学校にはいじめ・不登校対策委員会もあるので、複数の先生で１人の子どもを見ていくような体制づくりをきちんとしないと、大人の目線で見てしまって、いつのまにか男女をみるような目線になると困る。子どもたちは自分を信用してくれているということを常に思って、大事に愛してあげてほしい。人間が生きていくパートナー選びの愛ではなく、世界のみんなで楽しんで手をつないで頑張っていこうというような、愛を育むような教育をきちんとしていかないと、またこういう事件が起こりうる気がします。私の言いたいのは、本当に信頼なんて簡単にできるものではないということです。無くすのは簡単だけど、それを取り戻すのは本当に大変なことが必要になるので、子どもが人間不信にならないように、やはりいつまでも先生がおいでと言ったら、どんと飛び込んでくれるぐらいの信頼関係をもう１回築き上げなおしてほしいと思います。

○市長（山田　憲昭）

ありがとうございました。それでは教育長お願いします。

○教育長（田村　敏和）

各委員の皆様のお気持ち等を聞きながら、いくつか考えましたのでお話させていただきます。まず、先ほど研修をしっかりとというお話がございました。当然、今までも校長を通して、不祥事が発生するたびに、服務規律の確保、

綱紀粛正について話をしてまいりましたが、今回、逮捕された者の話を聞きますと、この者は、石川県教育委員会ならびに白山市教育委員会が行う、いわゆる初任者研修ということで１年間研修を受けたわけです。その中で、当然、服務規律のことや綱紀粛正についても研修を受けてきた。そういうことをしてはいけないと思ったけども、自分の欲求が勝ってしまいましたと。こうなってくると、研修をしたことだけでは、なかなか未然防止やいろいろなものにつながらないのではないかと思いました。そういう意味で、学校長を通して、再三指導をしたのですが、これは急ぎ対応しなければならないということで、今日から各学校へ、職務の管理担当の者を２名、いくつかの学校へ配置し、そこで、先生方全員に直接、教育委員会事務局として研修の機会を設けております。そして、その研修をしっぱなしにしていたのではないかということを私は反省しまして、ぜひ、この研修が終わった段階で先生方の意識調査、その研修を受けてどうだったのかという意識調査等をしていかなければいけないのかなということを思っております。また、先ほど、委員から子ども目線でとありましたが、各学校において、子どもや保護者の皆様の声をしっかり聞けていたのかなと思います。やはり、何かしら先生の事で思っていることがあった場合に、直接この教育委員会事務局としても、その心の中を、そして声を聞くようなことも必要なのかなということを考えています。そのようなこともどのようにやっていくか、今後検討していきたいと思います。そして、何よりも先ほど何人かからお話がございましたが、子どもや保護者の皆様の心のケアはしっかりやらなければならない。市の教育委員会には、３名の臨床心理士や元教員をしていた、スクールソーシャルワーカーが２名おります。今回の中学校の件でも、すぐに配置をさせていただき、もう一方の中学校にも、これは県のスクールカウンセラーですが配置をさせていただいて、心のケアに当たってまいりました。その中で何件かやはりご相談があり対応したということで、これからも継続して、必要があれば、そこをしっかり行っていきたいと思っておりますし、子どもたちや保護者の皆様の心のケアは絶対、最重点として優先して取り組まなければならないと思っております。まだまだいろいろな思いはございますが、先ほど先生方の気持ちが萎縮しないようにとのお話もございました。せっかく頑張っている先生方はたくさんいらっしゃるので、萎縮はしないようにしなけ

ればいけませんが、ただ、今このような緊急事態の状態でございますので、先生方には少々窮屈かと思いますけれども、きちんとした研修・指導をしてまいりたいと思っております。私からは以上です。

○市長（山田　憲昭）

みなさんのおっしゃることは全部もっともだと思うのですが、２ページの一番下に書いてありますけれども、この壁というものを超えたらなるということは、そういうことを持っている人がいて、そこを超える時のチェックはどうなのかということをやらないと、おそらくこういう行動を起こす人は、個人的な問題が多いと思います。この壁のチェックがあるのか、ないのかということです。竹内委員ではないですが、時々のチェックで、こんなことを思ったりしませんかということで、超えそうだということがわかれば、家庭で何か困ったことがあるかとか、ストレスがあるかという意味も含めて、未然にチェックできるようなかたち、研修をしてもあまり効果がないのかなということがあるのと、先ほどから言っているのは、ケアは必ず必要です。ケアが必要だということと、未然にそういう人をどうやってチェックすることができるかということが、研究する問題かなと思います。アリバイ作りに、研修したというだけでは進まないかなと。どうしたらその心の病のようなものが起きようとする時に、起きないようにするか、白山市だけの問題ではなく、全国で起きていますから、もう少し情報収集をしながらとは思いますが、そういうようなことをしなければ、本当に一握りの先生のために、学校全体が、教員全体が悪く思われるということは、残念なことだと思います。起こりうることではあるから、この壁を乗り越えようとする所で未然のチェックがあれば一番いいかなと思っています。

○委員（竹内　千恵子）

お互いに監視するような社会は、学校の中ではあってほしくないです。先生方は力を合わせて学校を良くしようとしていらっしゃる。そうすると、自己が自分で確認するというような機会が増えるのがいいかなと。教育委員会が来るからとか、校長が見ているからとか、そういった監視ではなくて、先生方が

自分で振り返る、そういうようなシステムが出来ればいいかなと思います。

○市長(山田　憲昭)

学校の先生になるぐらいの方だから、常識は知っています。常識を知っているのだけれども、その常識以上に衝動的になる部分を止められるようにしてあげれば。

○委員（竹内　千恵子）

誰でも衝動があって、誰でもストレスがあって、その発散の仕方を、良識ある大人ならば、きちんと出来るのに、なんでこの人たちは、それができないのかということが不思議です。

○市長(山田　憲昭)

そこに行かないために、何か方法がないかということですね。

○委員（小寺　正彦）

人間みんながストレスを抱えておりますし、私も現役の時は、ストレスだらけで仕事をしてきました。私の知っている先生にも、趣味を持っている先生がたくさんいます。そこで発散しているのですけれども、不祥事を起こす先生というと、趣味がなかったり、クラブ活動に力を入れなかったり、そのような先生が多いのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

○学校指導課長（日向　正志）

非常にむずかしい部分で、個別のところまでは掴んでいないのですけれども、今回の件に関しては中学校ばかりで、全員、部活動の顧問として取り組んでいたと聞いております。その熱心度が別の方向にというようなことにもなっていった部分もあったのかも知れないと思いますし、それから趣味ということに関して言えば、わからない部分はありますけれども、決して趣味を持っていないということではなかったのではないかとは思います。ただこれはあくまでも思いますとしか言いようがないことなので。

○教育長職務代理者（北田　朋幸）

行動の中で、この先生は異性に甘くないかというような行動かあるのではないかと少し思います。まわりの、例えば学年担当などで、そういった所をしっかり見てあげて、先生はすべての子どもたちに平等でなければならないという部分と、先ほどアンケートと言われたように、先生の行動について嫌なことがないか、子どもにも聞かなければならない。部活に関しても、写真や映像を撮るということもあったようなので、そういうことが本当に必要なのか、行き過ぎた指導からおかしくなってくる部分もある。部活の動作をチェックするために撮って、本来ならその場で子どもに見せて、指導してから消せば済む話だけれども、それをずっと持ったままでためていくと、また壁を超えるような衝動が次々出てくる場合もあると思います。その行動の微妙なところを、まわりの先生がお互いに気を付けて、誰か少し突出した子どもが出てきたら、個人的なことにはみんなで関わるような対処があるのではないかと思います。それから、趣味を聞くというのも大事で、趣味がある人というのは、それに没頭できるのだけど、趣味がないことで、発散場所がなくなるということは、壁を超える可能性が出てくるのではないか。先ほど竹内委員が言われたように、教員にたくさん聞いて、いろんな可能性を網羅していかないと、いつ何時豹変するかわからない。そうなる前に抑えるということは、とても難しい話で、こちらのできる範囲でしかできないですが。

○市長（山田　憲昭）

これはまた、一般的なことだけれども、今回は子どもに向かっていったということもあるし、そのストレスということに関して言えば、自分が鬱になってしまうとか、そういう場合もあるかもしれない。どこに向かっていくかと言ったときに、やっぱり職場でお互いにチェックし合えること、相談にのれるようなことというのは、どっちに向かっていこうと大事なのでしょうね。

○委員（竹内　千恵子）

ストレスチェックはしていますよね。

○学校指導課長（日向　正志）

はい、しています。

○委員（竹内　千恵子）

教員は、ストレスチェックは年１回、しなければならない。

○教育長（田村　敏和）

ストレスチェックで、チェックの入った方は、必要に応じて、産業医が面談しています。何人か面談しました。

○教育長職務代理者（北田　朋幸）

それは年に１回ですか。もっと増やしていればよかった。

○市長(山田　憲昭)

そのチェックの中に今の対象者はいたのですか。

○教育長（田村　敏和）

いません。

○市長(山田　憲昭)

その辺に難しさがありますね。そういう意味では、もう少しチェックし合えるような環境作りがあってもいいかもしれません。先生のその行為はちょっと危ない行為ですと注意というか、あ、そうだなと気づきを与えるような。

○教育長職務代理者（北田　朋幸）

多分、部活動においては、顧問と副顧問が二人体制で教えている部活が多いと思うので、やはり、二人で対応するようなかたち、一人の先生に任せきらないで、常に相談できる相手をそういったところではつけてあげないと、だめなのかなと思います。

○市長(山田　憲昭)

今回は、わいせつのことですが、いじめ・体罰も、特にそういうチェックが必要です。

○教育長（田村　敏和）

以前、体罰も非常に多くでて、処分者が多くでた時期があったのですが、体罰調査ということで、子どもたちに、家に帰って、年１回の調査をいまだにずっとしています。それでいわゆる体罰という案件は今ぐっと減った状態になっています。

○市長(山田　憲昭)

子どもから聞くということですか。

○教育長（田村　敏和）

はい。

○教育長職務代理者（北田　朋幸）

セクハラと言っていいか分かりませんが、そういうニュアンスのものを子どもたちに聞いてもいいでしょうか。

○市長(山田　憲昭)

監視の目があるということから言うと、投書箱がありますよと子どもたちに言ったら、有効性があるのか。でも投書箱というと危ない面もありますね。

○委員（竹内　千恵子）

その情報がフェイクの場合もありますし、学校の中に誰かのネガティブな意見を書いて出すというのは、いいところを見つけようという学校の活動が片方でされているのに、あまりお互いに監視とか、確かに２０～３０代がほとんどですが、では２０～３０代が要注意かというと、学校の中ではある程度、研修が終わってそれなりの地位についてきてということで、少しゆるむ時期

かなと思いますが、ほとんどの先生はきちんとしておられるので、これは個人の問題だと私は思います。だから、一部の個人の癖を見つけるために、ネガティブなことをたくさん書かせたり、お互いに監視というよりは、定期的にこんなことは大丈夫ですか、と個人が振り返れるような、機会を与えていったほうが、学校運営としては、子どもたちにとってはいいのではないかと思います。一部だからいいというわけではありませんが、ほとんどの先生が非常に一所懸命やっていらっしゃって、この２０～３０代の人たちが学校の中心になってやっていらっしゃいます。

○教育長職務代理者（北田　朋幸）

こういうことが公にでてくると、どうしてもそういう年代の先生をそういうふうに見てしまう。

○委員（竹内　千恵子）

それは私たちも注意しなければならない。

○教育長職務代理者（北田　朋幸）

本当に一所懸命されてる先生が多い中で、本当にわずかの先生のことなのだけれど、本当にそれが腹立たしい。

○委員（竹内　千恵子）

学校の今の様子というのはどうでしょうか。不祥事のあった学校では大分落ち着いて、子どもたちは普段の勉強、スポーツをしているのでしょうか。代わりの先生がきちんと来て、授業がなされているのでしょうか。

○学校指導課長（日向　正志）

１つの中学校につきましては、先生方も入っていただいていまして、授業も遅れることなくやっております。どちらの中学校にしても、先日、保護者説明会を開かせていただいたところ、保護者の中からも、学校では平静を装っているけれども、家に帰って来ると、ちょっと言動が乱暴になっている傾向が

見られるというようなご意見もありました。それから、何か相談したいことがあったらおいでという待つ姿勢ではなくて、どの子にも声をかけて、自分から進んでいくことができない子どもたちも当然いるので、そういう子たちへの心のケア、普通そうに見えていても、やっぱり内心、不安であったり、心配であったり、怖かったり、いろんな思いがあるというようなご意見もありましたので、子どもたちの心のケアというものは大事にしていかなければならないと思っています。

○委員（竹内　千恵子）

こんな時期に相談においでと言ったら、よほど信頼関係がないと、なかなか相談にもいけませんよね。本当に難しいですね。

○学校指導課長（日向　正志）

特に今回のような案件でいくと、女生徒に関して言えば、担任が男の先生だったら本当に話ができるかなというようなこともありますので、そういう面での配慮を両校ともにしてはいますけれども、そういうところにも気を付けていかなければならないと思っております。

○教育長職務代理者（北田　朋幸）

こういうことがあったばかりなので、このままでは同性同士でなければ相談できない雰囲気ですよね。本当は人と人とのつながりなのですが。やっぱり自分の好きな先生にいろんな事を相談したいという気持ちは、絶対子どもたちにはあるので、それが男女だとややこしいことが起こる可能性が少しある。

○学校指導課長（日向　正志）

子どもたちの中には、男性の先生が怖いというような思いの子もやっぱりいるのではないかと思います。そういう子たちのケアというのは、本当にしっかりしていかないと、なかなか表面には出てこないかもしれないので、そういうことをフォローしていきたいと思います。

○委員（竹内　千恵子）

北田委員がおっしゃるように、信頼を取り戻すためには大変なエネルギーや時間をかけてやらなければならないですね。

○教育長職務代理者（北田　朋幸）

世間が個人として判断してくれればいいのですが、教員という職業で考えてしまう。

○市長（山田　憲昭）

このような行為や体罰等、いろいろなことがあるので、チェックと言うか、寄り添うというようなことが必要だと思います。先ほど少しでた働き方改革で、仕事がオーバーワークになったからという問題ではないような気がするのですが、その関連性はありますか。

○学校指導課長（日向　正志）

関連性につきましては、分析していかなければならない部分はあるのかもしれないと思いますが、私の個人的な考えですけれども、必ずしも因果関係があるとは思えないと思います。

○委員（安川　薫）

研修等で、自分をこう分析するということではなくて、自分をいろんな角度から見るという内容のものはありますか。

○学校指導課長（日向　正志）

研修の一部にはあると思いますが、われわれもこれから研究していかなければならないと思います。今言われたように、自分自身を振り返る、自分自身を一方向からではなくて、さまざまな方向から見る、またはお互いに見る。その時は小グループのワークショップのような研修もあっていいのではないかと思います。ただ、その少人数であったところで、例えば、自分はこんなことに興味を持っているんだということをはたして言えるか、言えないか。なかなか

言えないと思います。だからこういうわいせつ事案に関して、何かするときの難しさはやはりある。自分自身で振り返るしかない部分はあるのかもしれないと思います。

○委員（安川　薫）

振り返って、あっと思った時に、それでも前に進んでしまうというところで、それを自分で止められるようにしてもらわないと、そこまでしないとということですよね。

○学校指導課長（日向　正志）

さきほどからの４つの壁の中で、１つめ、２つめを乗り越えたけれど、３つめで、二人きりになるような空間を作らないであるとか、必ず誰かが見ているぞというというような場面設定であるとか、複数で対応するとか、そういうようなことで第３の壁を乗り越えさせないようなことはやっていかないといけないと思います。

○市長（山田　憲昭）

そんなことをしたら、懲戒だとわかっているはずなのだけれどもしてしまう。そこが難しい。逆に言うと、懲戒にならないように守ってやることも大事です。

○教育長職務代理者（北田　朋幸）

教員が少なくなっている中で、１人欠けることはものすごく市にとっては痛手なので、欠けることなく。

○市長（山田　憲昭）

やらないようにするということが大事です。

○教育長職務代理者（北田　朋幸）

やらない、やらせないということです。

○市長（山田　憲昭）

この問題は、信頼回復の意味も含めてどう取り組んでいくか、もちろんケアが一番大事ですし、それをしっかりやりながら、信頼回復のための手立てを時間をかけてやっていくということです。

○教育長職務代理者（北田　朋幸）

もう一つよろしいでしょうか。各学校で研修をしていると思いますが、各先生方にこの教職員の不祥事を受けてというアンケートのようなものは取らないのでしょうか。この不祥事をどう考えますかというような問いかけはしないのでしょうか。

○学校指導課長（日向　正志）

先ほど、教育長も一つの案として研修を受けての検証というお話もありましたけれども、そのタイミングがいいのか、どういう形でがいいのか分かりませんけれども、本日、委員の皆様からのご意見があったように、自分を振り返ったりするような場面という意味で、そういう機会というのは作る必要があるのではないかと思いますので、どのタイミングがいいのかはまた検討しながら取り組みたいと思います。

○市長（山田　憲昭）

信頼の回復には時間がかかるということを意識した上で、研修を一度したからいいというのではなく、何かいい方法を将来に向けて見つけていくという気持ちで、常に信頼回復のためにいろんな手立てを講じていくという気持ちであたってもらうということですね。ＰＴＡの皆さんも注目して、安心できる教育環境を作ってほしいと思っておられますので、ここはしっかりお願いしたいと思います。またいろいろな手立てがあれば、会議でなくても、こんなことをしているということがあればまた教えていただきたいと思います。

◎その他

○市長（山田　憲昭）

それでは、その他何かありますか。

○教育総務課長（米木　伸一）

特にありません。

○市長（山田　憲昭）

委員の皆さんもこれでよろしいですか。――――

ではおつかれさまでした。またよろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。

○教育総務課長（米木　伸一）

本日協議いただきました議題につきましては皆さまからのご意見を参考に、教育委員会として検討していきたいと思います。これを持ちまして、令和３年度第２回白山市総合教育会議を終了いたします。どうもありがとうございました。

閉会　午後５時２分